

●第22回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム

(2016年2月26-28日, スイス: チューリッヒ)

報告者: 山中信之 (ドイツ・エアランゲン大学, 主催者)

2016年2月26日から28日の三日間にわたり第22回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウムがスイス・チューリッヒ大学 UZH Asien-Orient- Institut の全面的な後援, および国際交流基金からの助成を得, Guido Gefter シンポジウム実行委員長 (チューリッヒ大学) のオーガナイズのもとに開催された。

本会のシンポジウムは先ず1994年に北ドイツのビーレフェルト市で準備会が催された後, 1995年以来, JaH (Japanisch an Hochschulen ドイツ語圏大学日本語教育研究会) を構成する各会員の持ち回りで毎年春に開催され, 「大学での日本語教育」のあり方などを共通に考える場, 情報交換の場となっている。JaHの会員数は現在約60名で, 本シンポジウムには会員29名, 非会員15名が参加した。冒頭の開会式ではチューリッヒ大学 Asien-Orient- Institut 所長 Prof. Dr. Angelika Malinar 氏からの歓迎の挨拶の後, 駐スイス日本国大使前田隆平氏によるスイスの日本語教育の状況報告に言及したスピーチ, ドイツのケルン文化会館館長立川雅和氏によるドイツ語圏の日本語教育全般に関わる現状報告を中心としたスピーチがあった。

シンポジウムそのものは, 先ず参加者全員による簡単な自己紹介と所属機関の現状報告が行われ, 和やかな雰囲気のもとに始まった。今回のシンポジウムでは米国プリンストン大学佐藤慎司教授を招聘講師として招き, 「教室における媒介語の使用」をテーマに, 今後のドイツ語圏大学の日本語教育がいかにあるべきか, そして, 実際に授業をする日本語教師がどのような教育理念, ビジョンを持って学生の指導に当たるか, といったことを様々な視野から検討, 議論した。佐藤教授は日本語教育を単なる言語教育の枠を超えた視点から捉えており, その幅広い経験や知識, そして最新の研究の成果を踏まえた講演「媒介語と複言語・複文化主義: 言語・文化の境界という問題」などの他, 佐藤氏の指導によるワークショップ「社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育: 事例紹介&活動案を考える」があった。

更に, チューリッヒ大学語学教師によるワークショップ「直接法による体験授業 (アラビア語, ペルシア語)」では媒介語を使用しない直説法による授業を実際に体験する活動もあった。また, 会員発表として「日本語授業において媒介語は必要か—トルコの大学での調査をもとに一」といった媒介語使用, 不使用に関する実践報告の他, ドイツ語圏の日本語教育を巨視的に見た「日本語教育におけるカリキュラムの連続性」という発表もあり, それぞれの発表・活動後の質疑応答では非常に活発な意見交換が行われた。

最後に, 招聘講師佐藤教授によるフィードバックと参加者の感想, 本会の今後の活動に関する提案などで今回のシンポジウムが締めくくられた。

尚, JaHのシンポジウムの基調講演, 発表原稿は本会の紀要 JaF で隔年にオンライン版およびプリントメディアにまとめられる。次号の発行は2017年の予定である。